# 人形映画製作所の教育映画、テレビ CM 作品に関する原資料の調査

## ―脚本、絵コンテ、原画、写真を中心にして―

角　　和博，西岡　英和，首藤舞央梨，中村　隆敏

Survey of Original Materials related to Educational Films and TV Commercials Produced by the Puppet Film Production: Scripts, Storyboards, Original drawings, and Photographs

Kazuhiro SUMI, Hidekazu NISHIOKA, Maori SHUTO, Takatoshi NAKAMURA

佐賀大学芸術地域デザイン学部研究論文集　第 6 巻
JOURNAL OF THE FACULTY OF ART & REGIONAL DESIGN
SAGA UNIVERSITY
NUMBER 6
March 2023

# 人形映画製作所の教育映画、テレビ CM 作品に関する原資料の調査
## ―脚本、絵コンテ、原画、写真を中心にして―

角　　和博[1]，西岡　英和[2]，首藤舞央梨[3]，中村　隆敏[4]

# Survey of Original Materials related to Educational Films and TV Commercials Produced by the Puppet Film Production: Scripts, Storyboards, Original drawings, and Photographs

Kazuhiro SUMI, Hidekazu NISHIOKA, Maori SHUTO, Takatoshi NAKAMURA

**要　　旨**

持永只仁のアニメーション制作は、戦前・戦中のセル画、戦後の中国での人形アニメーション映画製作、帰国後の人形映画製作所時代の人形アニメーションによる教育映画と CM 製作、およびランキン・バス・プロダクションからの注文を請け負った MOM 時代の人形アニメーション映画製作に分けられる。本報告では人形映画製作時代に製作された人形アニメーション映画作品とその製作財源ともなったテレビ CM 製作について調査した。

**【キーワード】** 持永只仁、人形映画製作所、人形アニメーション映画、テレビ CM、絵コンテ

## 1．はじめに

持永只仁は、1945（昭和20）年 3 月に満州に渡り 8 月の終戦を迎えた。当初は旧満州映画製作所の跡地で、中国共産党のために内田吐夢や木村荘十二らと啓民映画を作ったが、内戦つづきで映画製作が困難となり、中国黒竜江省興山にあった日本人小学校の跡地を改修し、東北電影製片廠を設立した。この時期に中国に古くから伝承され、農民の間に人気があった指や糸を使った木偶劇を復活して人形映画の製作に用いた。人形の操作手法には、糸操り（マリオネット）、手操り（棒つかい）、指人形（ギニヨール）、駒撮り（ストップモーション）などがある。その中で人形アニメーション映画でしか行えない手法は駒撮りで

[1] 佐賀大学芸術地域デザイン学部　研究員
Faculty of Art and Regional Design, Saga University Researcher
[2] 日本アニメーション学会会員
Membership of Japan Society for Animation Studies
[3] 佐賀大学地域デザイン研究科院生
Graduated Student, Faculty of Art and Regional Design, Saga University
[4] 佐賀大学芸術地域デザイン学部
Faculty of Art and Regional Design, Saga University

ある。この時期に木村荘十二が持っていた球体関節のついたモデル人形を借用し研究して、高さ30cm くらいの球体関節人形数体を作り、人形映画製作に用いた。このいきさつを持永は、「最初に思いついたのは、木村荘十二監督持っておられたフランス製の男女のモデル人形２体であった。それを借用して研究した[1)]。」と述べている。

中国で駒撮りによる人形映画製作を行った持永只仁は、1953（昭和28）年に中国から帰国して東京都田無に住み、国内で最初の本格的な一駒撮りの人形アニメーションの製作を始めた。1955（昭和30）年に稲村喜一らと共に「人形映画製作所」を設立し、1956年から1959年までに教育映画として９本の人形アニメーションを制作した[2)3)]。人形映画製作所は、この間の国内における人形映画製作の中心的存在であり、教育映画作品や CM 作品を数多く製作した。

前報告では、持永只仁の人形アニメーションに関する原資料のうち主に人形に関する整理・分類を取り上げた。本報告では、脚本、絵コンテ、原画および写真などについて整理・分類を行う。

## ２．研究方法

本報告では、人形映画製作所の９本の教育映画作品の制作時に用いられた脚本、絵コンテ、原画、写真などの未発表の原資料の整理と分類を行い、特徴的な箇所について作品制作の動機と制作過程を調査し、教育映画コンテンツに込めた制作意図を解明する。また、残された持永只仁のスナップ写真からテレビ CM の会社の種類：製薬会社、米国企業、食品製造会社など調査し、1953年から1959年頃のテレビ CM の意義と役割を検討する。

## ３．研究結果

### ３．１　人形映画製作所の教育映画作品

９本の教育映画作品のタイトルごとに作品の概要と制作過程で用いられた資料を記述する。

#### ３．１．１　瓜子姫とあまのじゃく　1956（昭和31）年

（スタッフ）製作：電通映画社、人形映画製作所（稲村喜一）、脚本：田中喜次、演出：田中喜次・持永只仁、撮影：岸次郎、２巻475m、18分、１月完成

（あらすじ）瓜から生まれた瓜子姫は、彼女を拾ったおじいさんとおばあさんのもとで、機織りをして皆となかよく暮らしていた。乱暴者で人の言うことを聞かないあまのじゃくは、村の中で孤独に暮らしていたが、瓜子姫が気に入らずいたずらをしようと機織り機をめちゃくちゃにしたところ、瓜子姫に見つかったのが切っ掛けで仲良くなっていった。一方瓜子姫の織った反物を狙った欲張りな物持ちたちは、あまのじゃくを利用して瓜子姫ごと奪おうと仕向けるが、瓜子姫の手伝いを買って出るほど仲良くなったあまのじゃくは彼女を襲わない。そこで物持ちは自ら瓜子姫を誘拐し、その道中であまのじゃくと味方の動物たちが物持ちを懲らしめる。瓜子姫を助けたことであまのじゃくは村の一員と認められ、彼もまた村の中で真面目に生きようと決める。

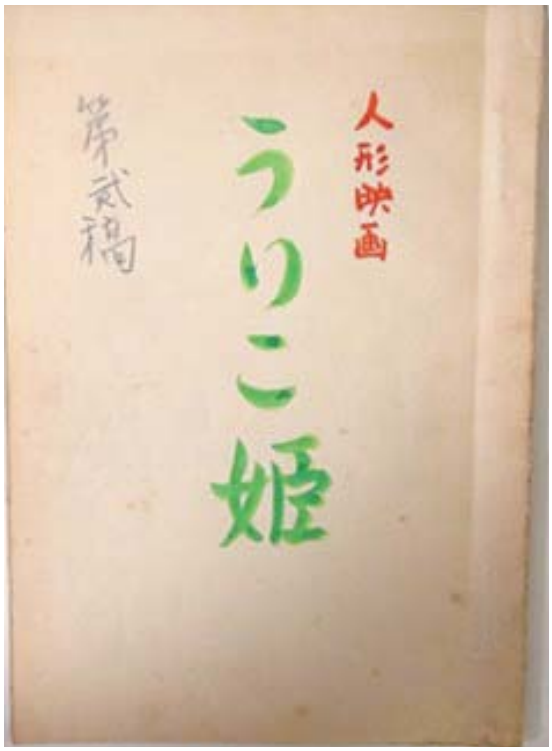
（主な登場人物・動物）瓜子姫・あまのじゃく・おじいさん・おばあさん・欲張りな物持ち三人・村の子供たち、若者たち

（特記事項）国内で最初の人形アニメーション映画

**表１　「瓜子姫とあまのじゃく」の制作資料**

| 作品タイトル | 資料内容 | サイズ・ページ数 | 製本・記述様式 | 作成年（推定） | 詳細 |
|---|---|---|---|---|---|
| 瓜子姫とあまのじゃく | 脚本草稿第一稿 | 200字詰原稿用紙・45枚 | ペラ原稿横綴じ・手書き | 1955年 | |
| | 脚本草稿第二稿 | 400字詰原稿用紙・58頁 | 縦平綴じ・手書き | 1955年 | |
| | 本編ネガフィルムブック | 280㎜×320㎜・６頁 | フィルムブックアルバム | ? | 一頁につき一本当たり４駒綴りフィルム９本・約100枚 |
| | 本編ポジフィルムブック | 208㎜×245㎜・13頁 | フィルムブックアルバム | ? | 一頁につき一本当たり４駒綴りフィルム８本・約400枚 |

表１の「瓜子姫とあまのじゃく」のうち、脚本草稿第二稿の表紙と原稿の一部を図１に示した。



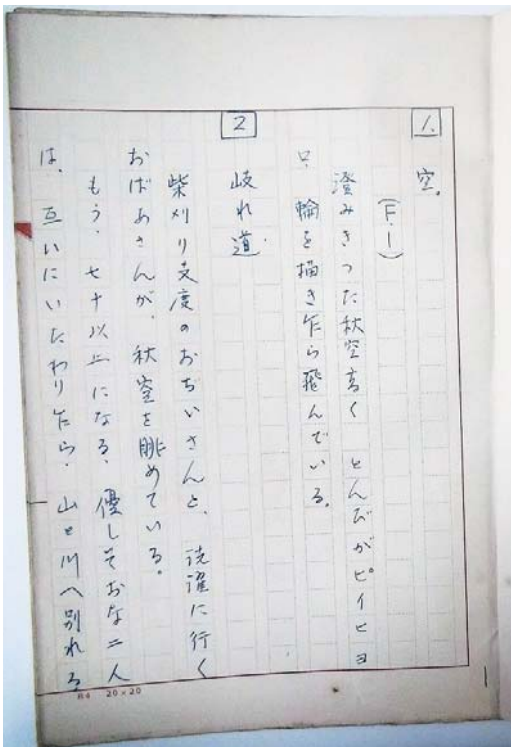




**図１　「瓜子姫とあまのじゃく」第２稿**

### ３．１．２　五匹の子猿たち　昭和31（1956）年

（スタッフ）製作：電通映画社、人形映画製作所（稲村喜一）、脚本：田中喜次、演出：持永只仁、田中喜次、撮影：岸次郎、美術：吉田謙吉、音楽：加藤三雄、２巻463m、17分、６月完成

（あらすじ）森の中で五匹の子猿たちと動物たちが平和に楽しく過ごしていた。そんな中、悪い狼が豊かな森を独り占めにしようと子猿たちを襲うが返り討ちにされ、怒った狼は森に火をつける。その火で森は全焼し狼も焼け死ぬが、森を復興する手立てがないと嘆く子猿たちに仲間の雉が、遠い山奥にある魔法の木の実で森が復活すると教えられ、子猿たちは旅立つ。旅の途中で絶壁の谷や山に巣食う大蛇に阻まれるが、知恵と勇気で乗り越えて子猿たちは木の実を手に入れ、元通りになった森でまた皆で仲良く暮らすこととなった。

（主な登場人物・動物）五匹の子猿・雉など森の仲間たち・狼・大蛇

（特記事項）1956年度教育映画祭最高賞受賞

**表２　「五匹の子猿たち」の制作資料**

| 作品タイトル | 資料内容 | サイズ・ページ数 | 製本・記述様式 | 作成年（推定） | 詳細 |
|---|---|---|---|---|---|
| 五匹の子猿たち | 脚本草稿完成台本（決定稿） | 200字詰原稿用紙・38枚 | ペラ原稿縦綴じ・手書き | 1955年 | |
| | 本編ポジフィルムブック | 240㎜×225㎜・18頁 | フィルムブックアルバム | ？ | 一頁につき一本当たり４駒綴りフィルム８本・576枚 |

表２の「五匹の子猿たち」のうち、脚本草稿完成台本（決定稿）の表紙と原稿の一部を図２に示した。

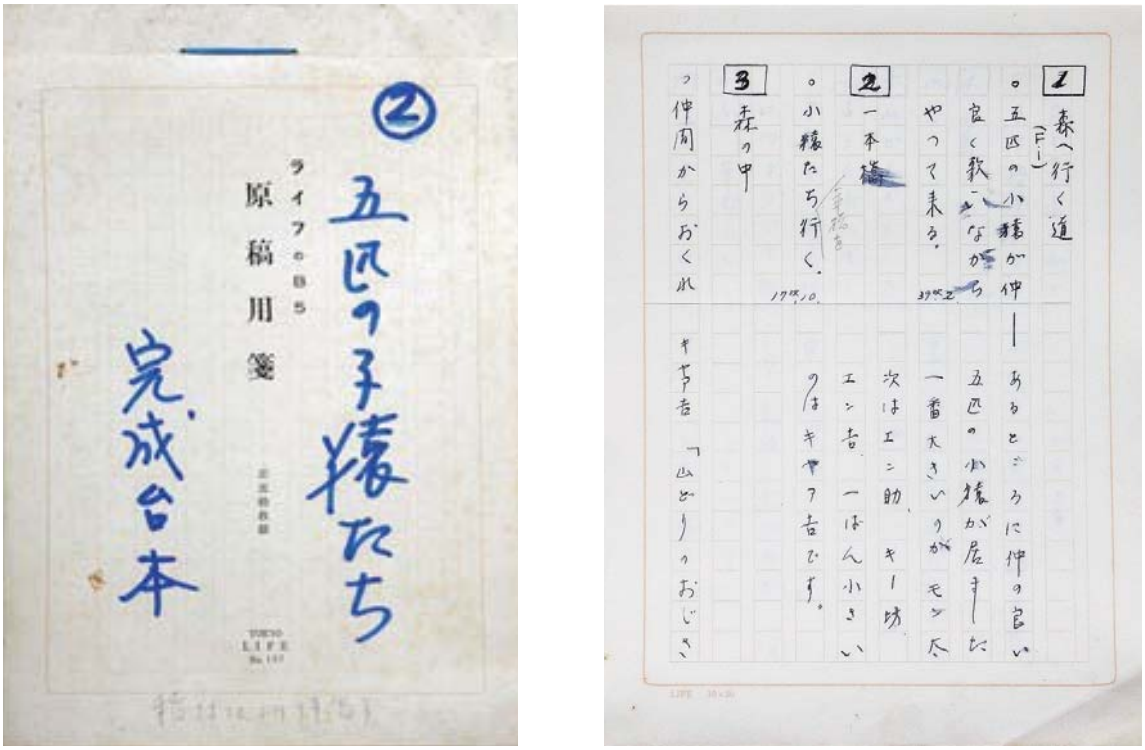



**図２　「五匹の子猿たち」完成台本**

### ３．１．３　ちびくろさんぼのとらたいじ　昭和31年（1956）

（スタッフ）製作：電通映画社、人形映画製作所（稲村喜一）、原作：ヘレン・バーマン、絵：フランク・ドビアス、訳：光吉夏弥：「ちびくろさんぼ」（岩波のこどもの本、1953年）、脚本：村治夫、演出：持永只仁、撮影：岸次郎、美術：江口準次、人形製作：川本喜八郎、音楽：加藤三雄、２巻475m、18分、11月完成

（あらすじ）暑い南の国に、サンボという少年とその両親が平和に暮らしていた。ある日お父さんからサンボは新しい洋服と洋傘をプレゼントされ、サンボは意気揚々と森へ散歩に出る。すると森に住む人食い虎に出くわし、命と引き換えに一帳羅の上着を奪われる。その後もサンボは２匹目、３匹目の人食い虎に出くわし、ズボンと傘を奪われる。悲嘆に暮れるサンボは虎の彷徨を聞きまた襲われるとヤシの木に登るが、３匹の虎は互いの戦利品を狙って仲間割れを起こし、サンボの登る木の下で争ううちに木の周りをぐるぐると回りだし、あまりの激しさに溶けてバターになってしまう。サンボはそのバターをお土産に帰り、お母さんにドーナツを揚げてもらい、たらふく食べた。

（登場人物・動物）サンボ・お父さん・お母さん・三匹の人食い虎・オウム・二匹の猿

（特記事項）1957年度教育映画祭最高賞、昭和31年度文部省特選、昭和32年度キネマ旬報日本短編映画ベ

ストテン入選、1957年度第１回バンクーバー国際映画祭最優秀賞受賞

**表３　「ちびくろさんぼのとらたいじ」の制作資料**

| 作品タイトル | 資料内容 | サイズ・ページ数 | 製本・記述様式 | 作成年（推定） | 詳細 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| ちびくろさんぼのとらたいじ | 撮影台本（撮影使用メモ書込） | Ｂ５・26頁 | 縦平綴じ製本・手書き | 1956年 | | 表紙にコンティニュイティ・２巻と附記 |
| | 絵コンテ（撮影使用メモ書込） | 224㎜×314㎜・11頁 | 絵コンテ用紙横綴じ・手描き | 1956年 | 横駒運び・枠線は印刷 | 用紙右下に人形映画製作所コンテ用紙と記載 |
| | 本編ネガフィルムブック | 222㎜×305㎜・16頁 | フィルムブックアルバム | ? | 一頁につき一本当たり４駒綴りフィルム９本・約300枚 | 表紙に画ネガと附記 |
| | 本編ポジフィルムブック | 225㎜×247㎜・16頁 | フィルムブックアルバム | ? | 一頁につき一本当たり４駒綴りフィルム８本・約400枚 | |
| | スチル写真スナップブック | 222㎜×305㎜・20頁 | フィルムブックアルバム | ? | 本編ベタ焼き・スチル・公開時チラシ・スクラップ等 | 表紙にスナップ・1956年11月と附記 |
| | タイムシート | Ｂ４・４枚 | 専用シート横綴じ | 1956年 | | 用紙左下に電通映画社と印刷 |
| | タイムシート（上記のコピー機複製） | Ｂ４・４枚 | 専用シート横綴じ | ? | | 用紙左下に電通映画社と印刷 |

表３の「ちびくろさんぼのとらたいじ」のうち、絵コンテ（撮影使用メモ書込）の表紙と絵コンテの一部を図３に示した。

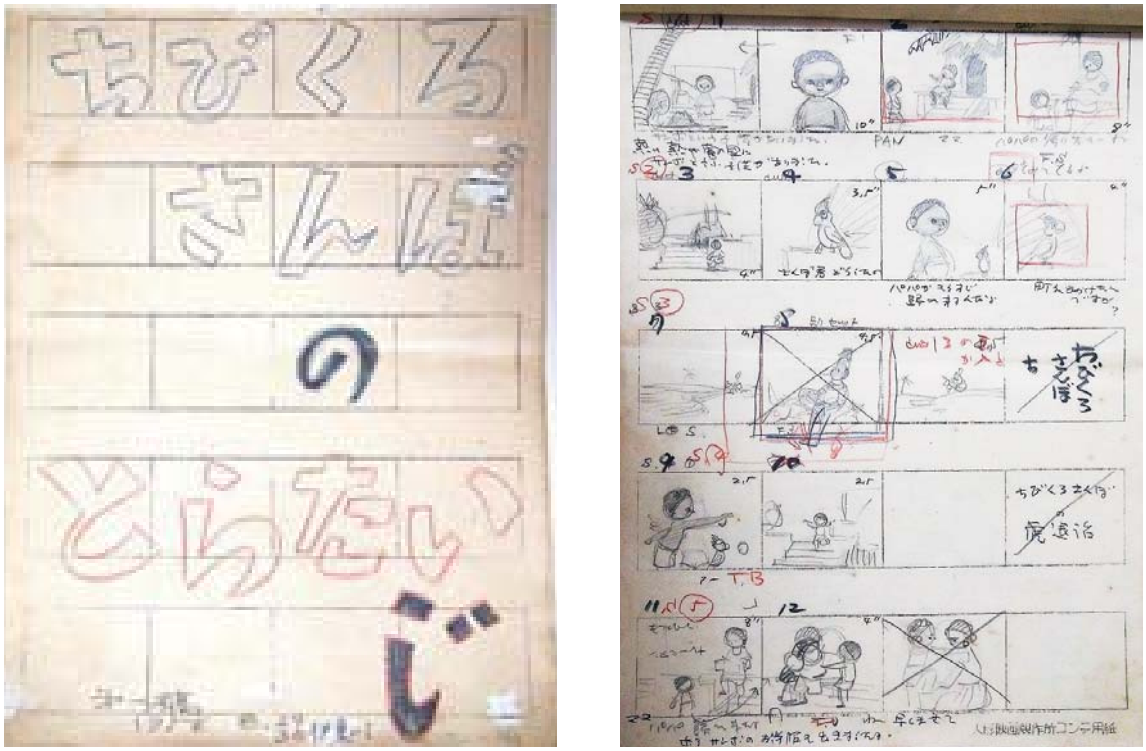



**図３　「ちびくろさんぼのとらたいじ」第１稿**

図４にちびくろさんぼの表情の５つの変化を示した。

**図４　ちびくろさんぼの表情の５つの変化**

### ３．１．４　ちびくろさんぼとふたごのおとうと　昭和32年（1957）

（スタッフ）製作：電通映画社、人形映画製作所（稲村喜一）、原作：ヘレン・バーマン、絵：フランク・ドビアス、訳：光吉夏弥：「ちびくろさんぼ」（岩波のこどもの本、1953年）、脚本：村治夫、演出：持永只仁、美術：江口準次、人形製作：川本喜八郎、撮影：岸次郎、音楽：加藤三雄　２巻463m、17分、３月完成

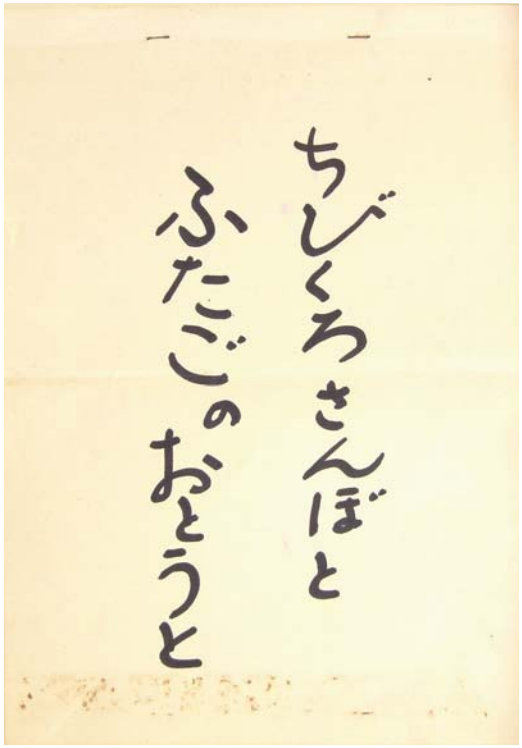
（あらすじ）暑い国に住むサンボにふたごの弟が生まれ、サンボは二人の小さい弟の世話をする。そしてサンボが目をちょっと離した隙にハゲタカが弟たちを奪い去り、ハゲタカの子供の餌にしようとする。サンボは友達の二匹の猿からその事を聞き、ハゲタカの巣に駆け寄るが高くて助けようがない。そこでオウムの力を借りて木に紐をかけ、火を起こして火事に見せかけた隙に弟たちを助ける。その夜は弟たちの誕生日で、ケーキを囲んでお祝いをした。

（登場人物・動物）サンボ・二人の弟・ハゲタカとその子供・二匹の猿・オウム・おとうさん・おかあさん

**表４　「ちびくろさんぼとふたごのおとうと」の制作資料**

| 作品タイトル | 資料内容 | サイズ・ページ数 | 製本・記述様式 | 作成年（推定） | 詳細 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| ちびくろさんぼとふたごのおとうと | 完成台本（鉛筆書き見本） | 200字詰原稿用紙・95枚 | ペラ原稿縦平綴じ製本・手書き | 1956年 | | 表紙に手書き映倫マーク・番号入り附記 |
| | 絵コンテ | A48頁 | 手描きの複写 | 1956年 | | |
| | 撮影台本１（撮影使用メモ書込） | B５・46頁 | 縦平綴じ製本・手書き | 1956年 | | 表紙白黒刷り・所有者サイン不明 |
| | 撮影台本２（撮影使用メモ書込） | B５・46頁 | 縦平綴じ製本・手書き | 1956年 | | 表紙カラー表題・５番『山口サンのオバサン』とサイン |
| | 撮影台本３（未使用） | B５・46頁 | 縦平綴じ製本・手書き | 1956年 | | 表紙カラー表題・25番 |
| | 本編ポジフィルムブック | 225㎜×247㎜・16頁 | フィルムブックアルバム | ? | 一頁、一本当たり４駒綴り | |

表４の「ちびくろさんぼとふたごのおとうと」のうち、絵コンテの表紙と絵コンテの一部を図５に示した。



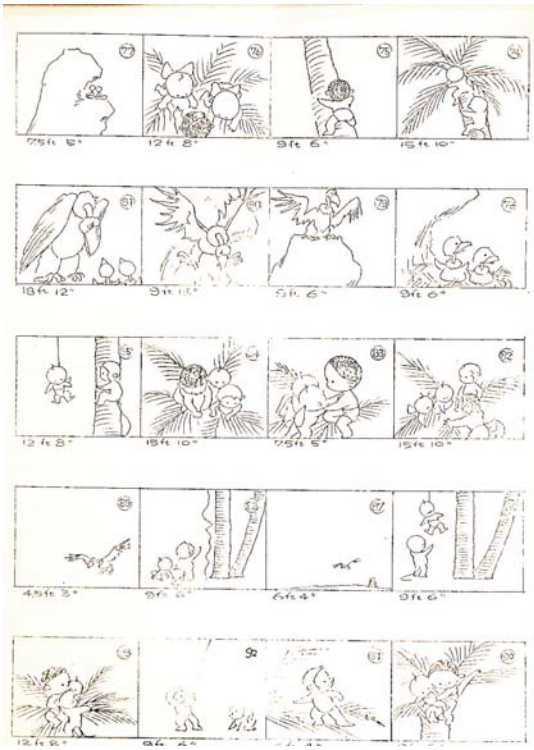



**図５　「ちびくろさんぼとふたごのおとうと」の絵コンテ（手描きの複写）**

### ３．１．５　ふしぎな太鼓　昭和32年（1957）

（スタッフ）製作：電通映画社、人形映画製作所（稲村喜一）、原作・絵：清水崑、文：石井桃子：「ふしぎなたいこ」（岩波のこどもの本、1953年）、脚本：村治夫、演出：持永只仁、田中喜次、撮影：岸次郎、人形製作：川本喜八郎、２巻520m、19分、８月20日完成

（あらすじ）琵琶湖の近くに住む薬売りの源五郎は、山道で天狗の子供と遭遇し、崖から落ちそうになった子天狗を助けたお礼に、天狗の親から魔法の太鼓を授かる。その太鼓は聞かせた相手の鼻を伸ばす力があり、悪用してはならないという天狗の戒めを破って町人や侍などの鼻を伸ばすいたずらを繰り返す。噂を聞きつけた殿様は源五郎を召し上げ、褒美を取らせて源五郎の鼻を伸ばすよう要求する。源五郎は調子に乗って殿様の前で空に向けどんどん鼻を伸ばすが、雲上の雷様の怒りを買って琵琶湖に落とされる。太鼓も失った源五郎は湖の中でフナに姿を変え、これが源五郎鮒の由来となった。

（登場人物・動物）源五郎・天狗・子天狗・町人たち・殿様と臣下・雷様

**表５　「ふしぎな太鼓」の制作資料**

| 作品タイトル | 資料内容 | サイズ・ページ数 | 製本・記述様式 | 作成年（推定） | 詳細 |
|---|---|---|---|---|---|
| ふしぎな太鼓 | 完成台本（鉛筆書き見本） | 200字詰原稿用紙・101枚 | ペラ原稿縦平綴じ製本・手書き | 1957年 | |
| | 撮影台本１（撮影使用メモ書込） | Ｂ５・40頁 | 縦平綴じ製本・手書き | 1957年 | |
| | 撮影台本２（絵コンテ・シート付・書込） | Ｂ５・50頁・表紙布張り | 縦平綴じ製本・手書き | 1957年 | |
| | 本編ネガフィルムブック | 222㎜×305㎜・15頁 | フィルムブックアルバム | ? | 一頁につき一本当たり４駒綴りフィルム12本・約720枚 |
| | 本編ポジフィルムブック | 232㎜×248㎜・19頁・布張 | フィルムブックアルバム | ? | 一頁につき一本当たり４駒綴りフィルム８本・約600枚 |

表５の「ふしぎな太鼓」のうち、撮影台本に含まれるスケジュールと絵コンテの一部を図６に示した。

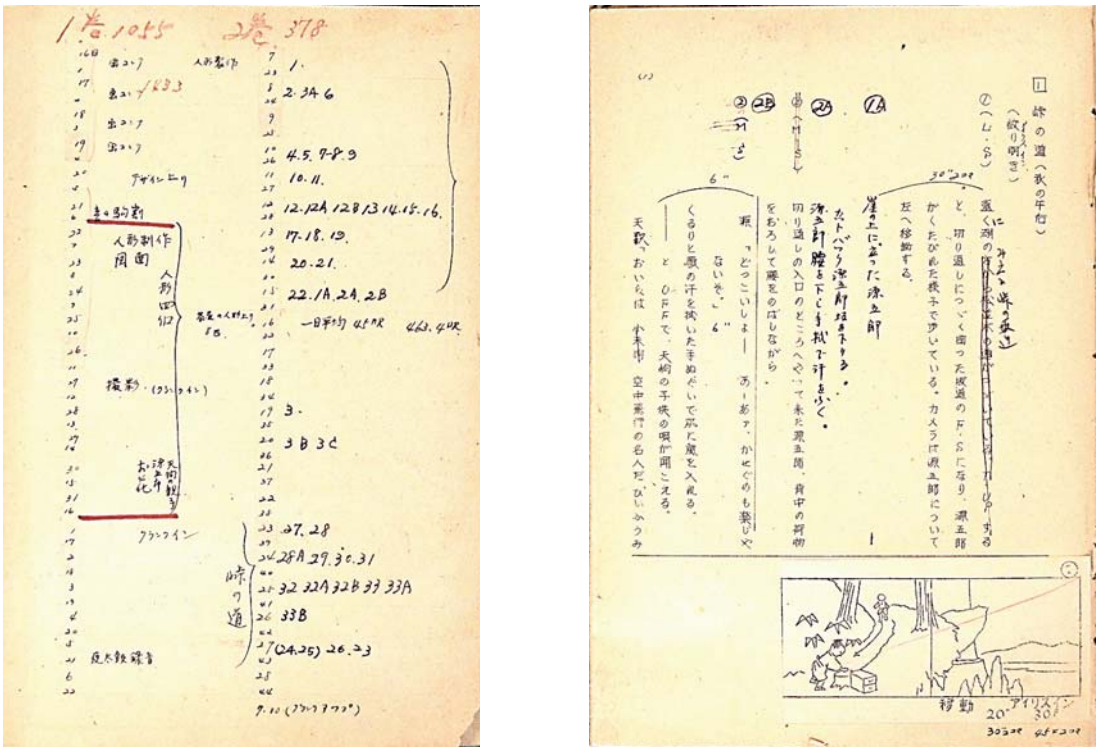


**図６　「ふしぎな太鼓」の撮影台本と絵コンテ**

### ３．１．６　こぶとり　昭和33（1958）年

（スタッフ）製作：電通映画社、人形映画製作所（稲村喜一）、脚本：田中喜次、演出：持永只仁・田中喜次、撮影：岸次郎、美術監督：水谷浩、人形製作：川本喜八郎、照明：上村栄喜、音楽：加藤三雄、録音：田中啓次、２巻573m、21分、１月完成

（あらすじ）山中にきこりを営む歌と踊り好きの陽気なおじいさんと、頑固なおじいさんが住んでおり、二人とも頬に瘤を患っていた。陽気なおじいさんが仕事中に大雨に逢い、木の洞で休んでいると鬼の行列を見かける。後を追うと、鬼の大群が洞窟の根城で歌い踊っていた。陽気なおじいさんはつられて一緒に踊ってしまい、その見事さを買われて鬼の頭領に瘤を取ってもらう。頑固なおじいさんにも鬼に瘤を取ってもらうよう勧めるが、かえって頭領を怒らせ頑固なおじいさんは瘤を増やされてしまう。陽気なおじいさんは計略を練り、偽の瘤を生やして鬼のご機嫌を取り、頑固なおじいさんの瘤まで取ってもらい、心を開いた頑固なおじいさんも皆と一緒に歌い踊った。

（登場人物・動物）陽気なおじいさん・頑固なおじいさん・鬼の軍勢

（特記事項）溝口健二監督作品の美術監督であった水谷浩が美術を担当

**表６　「こぶとり」の制作資料**

| 作品タイトル | 資料内容 | サイズ・ページ数 | 製本・記述様式 | 作成年（推定） |
|---|---|---|---|---|
| こぶとり | 完成台本（鉛筆書き見本） | 200字詰原稿用紙 | ペラ原稿横綴じ・手書き | 1957年 |
| | 撮影台本１（撮影使用メモ書込） | Ｂ５ | 縦平綴じ製本・手書き | 1957年 |
| | 撮影台本２（撮影使用メモ書込） | Ｂ５ | 縦平綴じ製本・手書き | 1957年 |
| | 撮影台本３（未使用） | Ｂ５ | 縦平綴じ製本・手書き | 1957年 |
| | 絵コンテ（撮影使用メモ書込） | Ｂ４・８枚 | 横綴じ・ガリ版印刷 | 1957年 |
| こぶとり | 上記絵コンテの控えコピー | Ｂ４・８枚 | 横綴じ・コピー用紙 | ? |
| | 香盤表・音楽音響タイムシート | Ｂ４・６枚 | 縦綴じ・ガリ版印刷 | 1957年 |
| | 上記香盤表のコピー＋劇中歌詞 | Ｂ４・７枚 | 横綴じ・コピー用紙 | ? |
| | 教配の宣伝チラシ | Ｂ５・１枚 | カラー印刷 | 1958年 |
| | 本編ネガフィルムブック | 224mm×314mm | フィルムブックアルバム | ? |
| | スチル写真スナップブック | 222mm×305mm | フィルムブックアルバム | ? |

表６の「こぶとり」のうち、香盤表・音楽音響タイムシートの一部を図７、図８に示した。

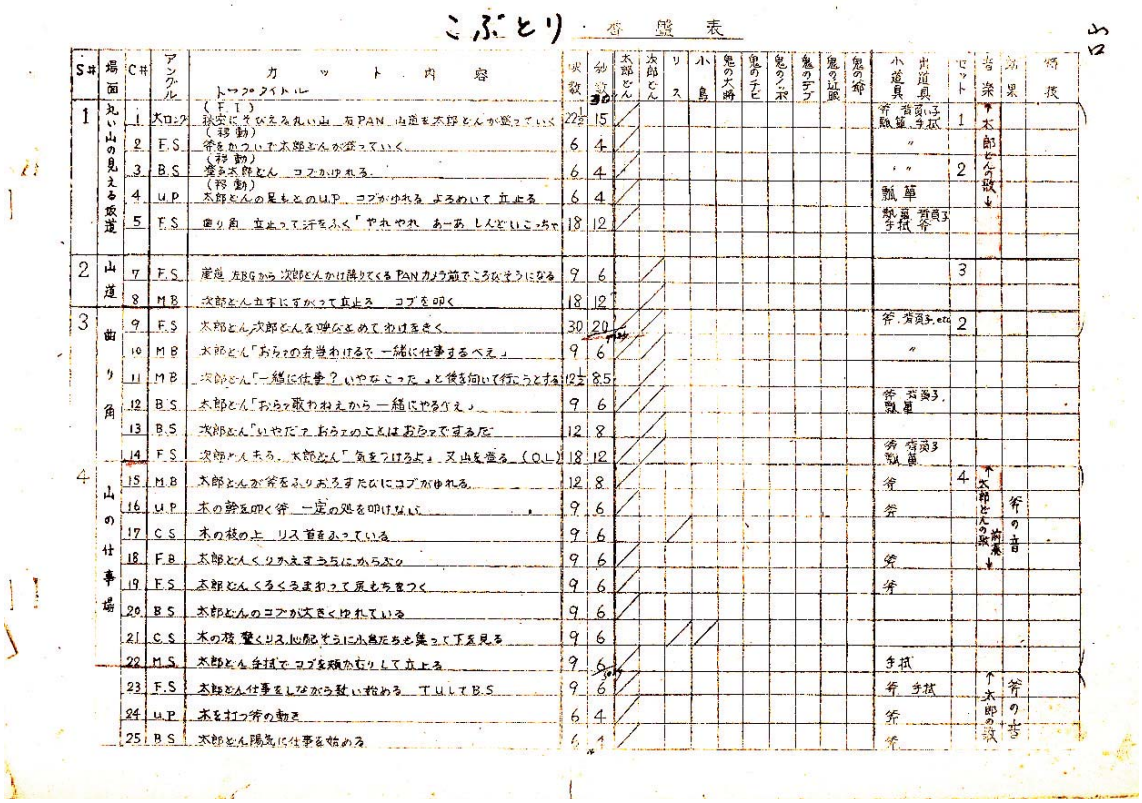
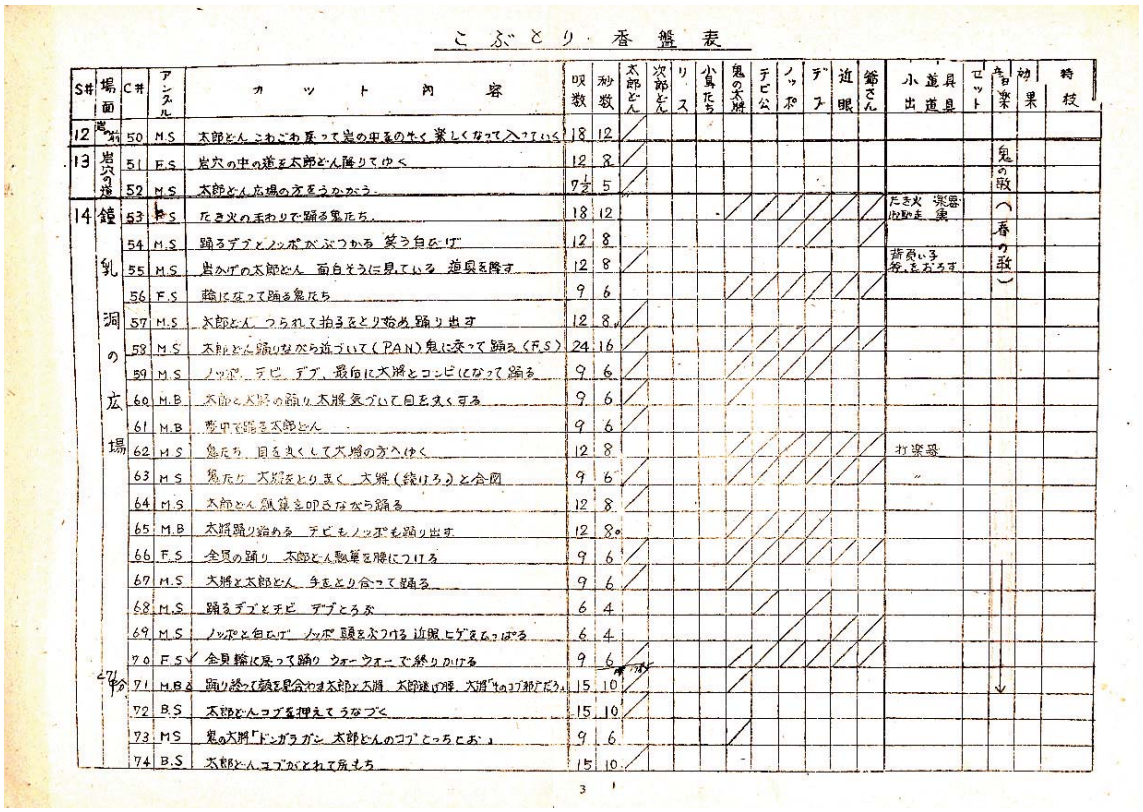



**図７　「こぶとり」の香盤表**



こぶとり・香盤表

| S# | 場面 | C# | アンタル | カット内容 | 秒数 | 秒数 | 太郎どん | 次郎どん | リス | 小鳥たち | 鬼の大将 | テビ公 | ノッポ | デブ | 道眠 | 爺さん | 小道具 出道具 | セット | 音楽 | 効果 | 特技 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 12 | 鬼ヶ島 | 50 | M.S | 太郎どん こわごわ歩って岩の中をのぞく 楽しくなって入っていく | 18 | 12 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 13 | 岩穴の道 | 51 | F.S | 岩穴の中の道を太郎どん降りてゆく | 12 | 8 | | | | | | | | | | | | | 鬼の敵（春の敵） | | |
| | | 52 | M.S | 太郎どん広場の方をうかがう | 7½ | 5 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 14 | 鐘乳洞の広場 | 53 | F.S | たき火の廻りで踊る鬼たち | 18 | 12 | | | | | | | | | | | たき火 湯器 仮動き 鬼 | | | | |
| | | 54 | M.S | 踊るデブとノッポがぶつかる 笑う白なげ | 12 | 8 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | 55 | M.S | 岩かげの太郎どん 面白そうに見ている 道具を降す | 12 | 8 | | | | | | | | | | | 黄色い子 笑をおろす | | | | |
| | | 56 | F.S | 輪になって踊る鬼たち | 9 | 6 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | 57 | M.S | 太郎どん つられて拍子をとり始め 踊り出す | 12 | 8 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | 58 | M.S | 太郎どん踊りながら近づいて（PAN）鬼に交って踊る（F.S） | 24 | 16 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | 59 | M.S | ノッポ、テビ、デブ、最后に太郎とコンビになって踊る | 9 | 6 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | 60 | M.B | 太郎と太郎の踊り 太郎気づいて目を丸くする | 9 | 6 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | 61 | M.B | 夢中で踊る太郎どん | 9 | 6 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | 62 | M.S | 鬼たち 目を丸くして太郎の方へゆく | 12 | 8 | | | | | | | | | | | 打楽器 | | | | |
| | | 63 | M.S | 鬼たち 太郎をとり巻く 太郎（続けろ）と合図 | 9 | 6 | | | | | | | | | | | 〃 | | | | |
| | | 64 | M.S | 太郎どん 鼓笛を叩きながら踊る | 12 | 8 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | 65 | M.B | 太郎踊り始める テビもノッポも踊り出す | 12 | 8 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | 66 | F.S | 全員の踊り 太郎どん鼓笛を腰につける | 9 | 6 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | 67 | M.S | 太郎と太郎どん 手をとり合って踊る | 9 | 6 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | 68 | M.S | 踊るデブとテビ デブとろか | 6 | 4 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | 69 | M.S | ノッポと白なげ ノッポ 顔をぶつける 道眠 ヒゲをむっぱる | 6 | 4 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | 70 | F.S | 全員輪に戻って踊り ウォーウォーで終りかける | 9 | 6 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | 71 | M.B | 踊り終って顔を見合わす太郎と太郎 太郎逃げ腰 大将のコブ部だろ | 15 | 10 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | 72 | B.S | 太郎どんコブを押えてうなづく | 15 | 10 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | 73 | M.S | 鬼の大将「ドンガラガシ 太郎どんのコブとっちとお」 | 9 | 6 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | 74 | B.S | 太郎どんコブがとれて喜もち | 15 | 10 | | | | | | | | | | | | | | | |

**図８　「こぶとり」の香盤表**

### ３．１．７　ぶんぶくちゃがま　昭和33（1958）年

（スタッフ）製作：電通映画社、人形映画製作所（稲村喜一）、演出：持永只仁、撮影：岸次郎、美術：久保一夫、人形製作：川本喜八郎、照明：鈴賀隆夫、音楽：加藤三雄、録音：田中啓次、２巻358m、13分、５月完成

（あらすじ）屑屋の佐平は茂林寺の和尚に茶釜を探すよう頼まれていたが、見つけられない帰り道で罠にかかったタヌキを助けると、家になぜかちょうど良い茶釜が置いてあった。佐平は和尚さんに茶釜を売り渡すが、小僧の珍念が扱うとタヌキが化けていたことがばれ、和尚さんに怒られ売買を反故にされる。悪く思ったタヌキは佐平に恩を返そうと、見世物小屋で茶釜に化けたまま曲芸を披露して観客から喝采を浴び、二人は仲良く見世物小屋を営むこととなる。

（登場人物・動物）屑屋の佐平・タヌキ・和尚・珍念

**表７　「ぶんぶくちゃがま」の制作資料**

| 作品タイトル | 資料内容 | サイズ・ページ数 | 製本・記述様式 | 作成年推定 |
|---|---|---|---|---|
| ぶんぶくちゃがま | 脚本草稿肉筆１（中江隆介名義） | 200字詰原稿用紙 | ペラ原稿用紙横綴じ・鉛筆 | 1958年 |
| | 脚本草稿肉筆２ | Ｂ５便箋 | ペラ原稿用紙横綴じ・万年筆 | 1958年 |
| | 脚本草稿絵コンテ付（第一稿） | Ｂ５ | 縦平綴じ製本・活版印刷 | 1958年 |
| | スケジュール予定表 | Ｂ５ | 縦平綴じ製本・手書き | 1958年 |
| | タイムシート（Ｂ５版） | Ｂ５ | 縦綴じ・ガリ版印刷 | 1958年 |
| | 絵コンテ草稿 | 255㎜×275㎜・６枚 | 横綴じ・肉筆・枠ガリ版印刷 | 1958年 |
| | 絵コンテ決定稿 | 255㎜×275㎜・６枚 | 横綴じ・肉筆・枠ガリ版印刷 | 1958年 |
| | 絵コンテ（撮影使用メモ書込） | 250㎜×325㎜・６枚 | 横綴じ・ガリ版印刷 | 1958年 |
| | 絵コンテ草稿の控えコピー | 260㎜×280㎜・５枚 | 横綴じ・コピー用紙 | ? |
| | 絵コンテ決定稿の控えコピー | 260㎜×280㎜・６枚 | 横綴じ・コピー用紙 | ? |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| ぶんぶくちゃがま | タイムシート（Ｂ４版） | Ｂ４・４枚 | 横綴じ・肉筆・枠印刷 | 1958年 |
| | 上記タイムシートの控えコピー | Ｂ４・４枚 | 横綴じ・コピー用紙 | ? |
| | 教配の宣伝チラシ | Ｂ５・１枚 | カラー印刷 | 1958年 |
| | 本編ネガフィルムブック | 230㎜×300㎜ | フィルムブックアルバム | ? |
| | 本編ポジフィルムブック | 230㎜×240㎜ | フィルムブックアルバム | ? |

表７の「ぶんぶくちゃがま」のうち、絵コンテ（撮影使用メモ書込）の一部を図９に示した。

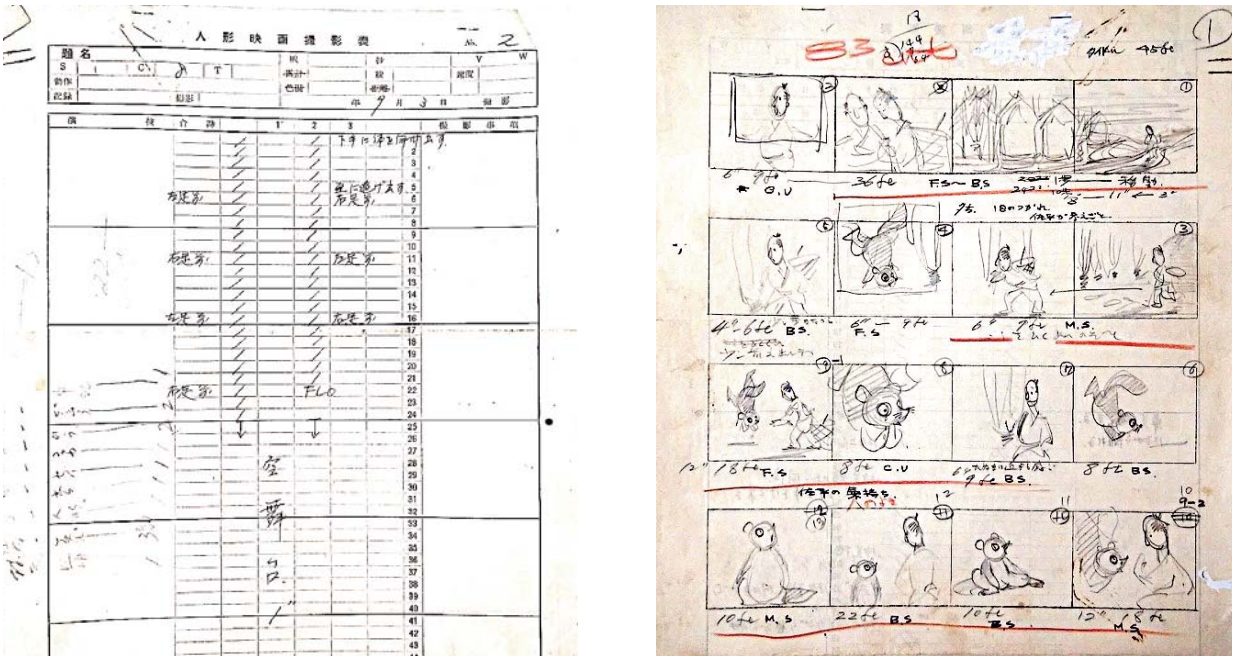



**図９　「ぶんぶくちゃがま」の絵コンテ（撮影使用メモ書込）**

### ３．１．８　ペンギンぼうやルルとキキ　昭和33（1958）年

（スタッフ）製作：電通映画社、人形映画製作所（稲村喜一）、脚本：村治夫、中江隆介、演出：持永只仁、撮影：岸次郎、人形制作：熊谷達子、音楽：林光、２巻461m、17分、９月完成

（あらすじ）南極で産まれたペンギンのルルとキキは、両親が餌を取りに行った隙に巣から離れてしまい、カモメから襲われているところを偶然、南極観測隊員に助けられた。ルルとキキがいなくなってペンギンたちは大騒ぎになるが、心優しい観測隊員に保護され、親元に返されて元の生活に戻る。

（登場人物・動物）ペンギンのぼうやルルとキキ・両親のペンギン・南極観測隊員・ペンギンの一群

**表８　「ペンギンぼうやルルとキキ」の制作資料**

| 作品タイトル | 資料内容 | サイズ・ページ数 | 製本・記述様式 | 作成年推定 |
|---|---|---|---|---|
| ペンギンぼうやルルとキキ | 脚本草稿１（鉛筆手書き） | 200字詰原稿用紙 | ペラ便箋横綴じ・鉛筆書き | 1958年 |
| | 脚本草稿２（万年筆手書き） | 200字詰原稿用紙 | ペラ原稿横綴じ・万年筆 | 1958年 |
| | 完成台本（万年筆手書き） | Ｂ５便箋 | ペラ便箋横綴じ・万年筆 | 1958年 |
| | 撮影台本（絵コンテ・シート付・書込） | Ｂ５ | 縦平綴じ製本・手書き | 1958年 |
| | 撮影記録（山口綾子署名） | Ｂ５ノート | 縦綴じＢ５ノート | 1958年 |
| | 絵コンテ決定稿 | 255㎜×275㎜・７枚 | 横綴じ・肉筆・枠印刷 | 1958年 |
| | 上記絵コンテの控えコピー | 260㎜×280㎜・７枚 | 横綴じ・コピー用紙 | ? |
| | 本編ネガフィルムブック | 230㎜×300㎜・12頁 | フィルムブックアルバム | ? |
| | 本編ポジフィルムブック | 230㎜×300㎜・15頁 | フィルムブックアルバム | ? |

表８の「ペンギンぼうやルルとキキ」のうち、絵コンテ決定稿の一部を図10に示した。

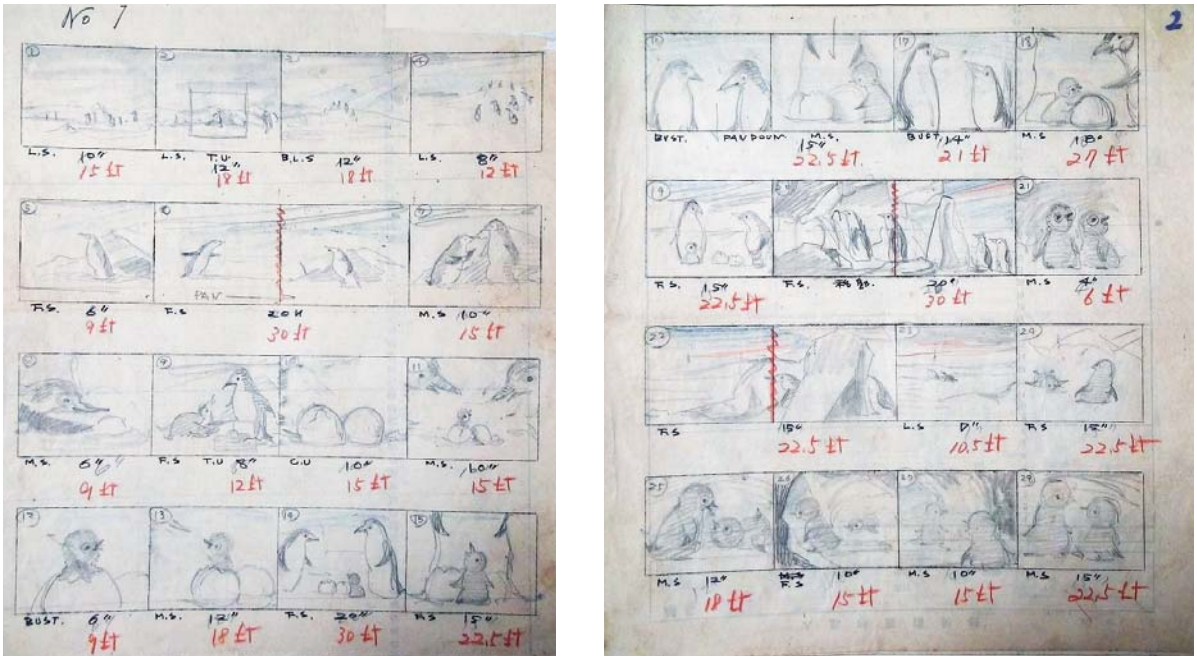


**図10　「ペンギンぼうやルルとキキ」の絵コンテ決定稿**

### ３．１．９　王さまになったきつね　昭和34（1959）年

（スタッフ）製作：電通映画社、人形映画製作所（稲村喜一）、脚本：中江隆介、演出：持永只仁、　撮影：岸次郎、人形製作：田畑精一、音楽：林光、２巻533m、19分、８月完成

（あらすじ）人家で犬に追い立てられて染物屋の蔵で輝く色に染まったきつねは、森に戻り王様の座に就くが、思いのほか退屈なため、きつねの頃を思い出して歌を歌うと動物たちにきつねであることがバレてしまい、森の中に逃げていく。

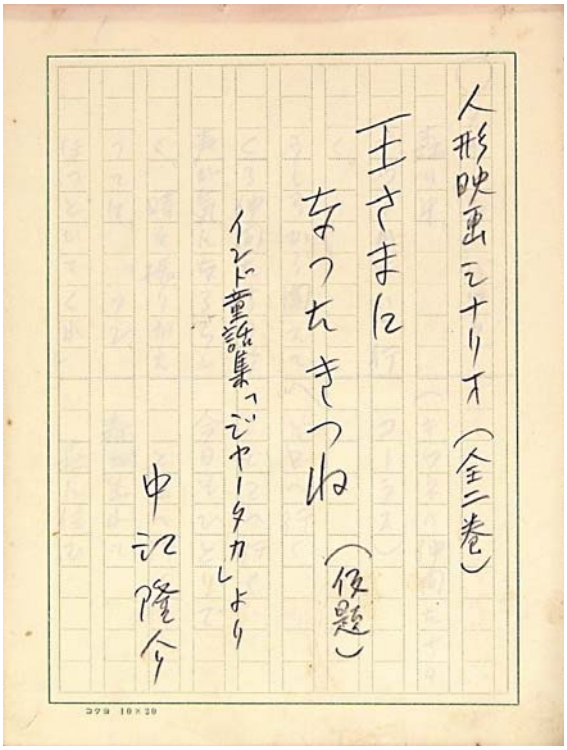
（登場人物・動物）きつね・森の動物たち（トラ、ライオン、カバ、猿、コブラなど）

（特記事項）持永只仁が人形映画製作所で作った最後の作品、第６回教育映画祭動画部門特別賞

**表９　「王さまになったきつね」の制作資料**

| 作品タイトル | 資料内容 | サイズ・ページ数 | 製本・記述様式 | 作成年推定 | 詳細 |
|---|---|---|---|---|---|
| 王さまになったきつね | 脚本草稿（鉛筆手書き） | 200字詰原稿用紙 | ペラ便箋横綴じ・鉛筆書き | 1958～59年？ | |
| | 本編ネガフィルムブック１ | 230㎜×300㎜・19頁 | フィルムブックアルバム | ? | 一頁につき一本当たり４駒綴りフィルム９本・約650枚 |
| | 本編ネガフィルムブック２ | 230㎜×300㎜・17頁 | フィルムブックアルバム | ? | 一頁につき一本当たり４駒綴りフィルム９本・約600枚 |
| | 本編ポジフィルムブック | 255㎜×275㎜・23頁 | フィルムブックアルバム | ? | 一頁につき一本当たり４駒綴りフィルム８本・約700枚 |

表９の「王さまになったきつね」のうち、脚本草稿（鉛筆手書き）の一部を図11に示した。



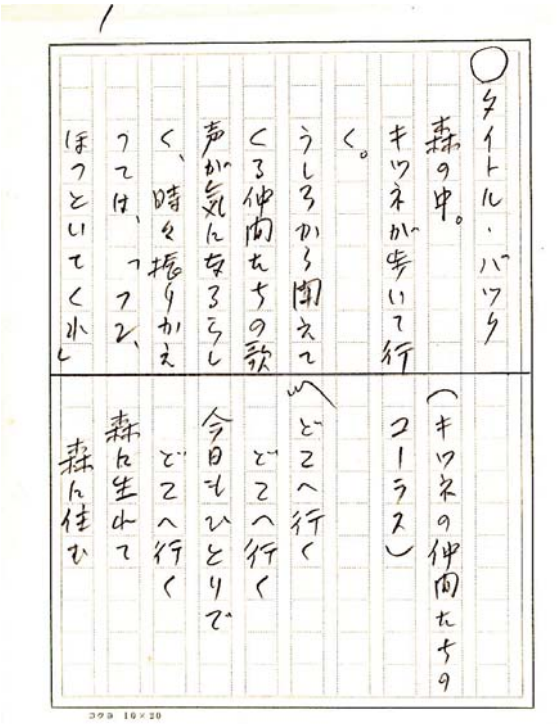




**図11　「王さまになったきつね」の脚本草稿（鉛筆手書き）**

### 3．1．10　少年と子だぬき　平成４（1992）年

（スタッフ）制作：童映社、原作：佐々木たづ、演出・技術構成：持永只仁、音楽：小森昭宏、美術：岸田香代子・鳴脇みえ子、人形：田畑純子、記録：山口綾子　編集：矢走直子、録音：アバコスタジオ・小島章　声：人形劇団ひとみ座、1992年／13分／カラー

（あらすじ）子だぬきは人間の少年たちと遊びたいと思い、お母さんだぬきに頼む。心配したお母さんだぬきは人間の女の子の姿にかえてあげた。山を下りて自転車に乗った男の人や郵便配達の人に挨拶する。自転車に乗った男の子とぶつかった子だぬきは、ケガをした男の子の足の傷に尻尾に浸した川の水をつけてあげる。男の子は子だぬきを自転車の後ろに乗せて送ってあげる。途中でくしゃみをした子だぬきは元のたぬきの姿に戻るが、男の子は気づかないままに自転車で送り続けて終わる。

（登場人物・動物）子だぬき・カラス・母だぬき・少年たち・男の人・郵便配達人・少年

（特記事項）持永只仁が最後に手掛けた人形アニメーション作品

**表10　「少年と子だぬき」の制作資料**

| 作品タイトル | 資料内容 | サイズ・ページ数 | 製本・記述様式 | 作成年（推定） |
|---|---|---|---|---|
| 少年と子だぬき | 脚本草稿第一稿（鉛筆手書き） | 200字詰原稿用紙 | ペラ便箋横綴じ・鉛筆書き | 1958年 |
| | 脚本草稿第二稿（鉛筆手書き） | 200字詰原稿用紙 | ペラ便箋横綴じ・鉛筆書き | 1958年 |
| | 脚本草稿第三稿（鉛筆手書き） | 200字詰原稿用紙 | ペラ便箋横綴じ・鉛筆書き | 1958年 |
| | 脚本草稿第三稿（同銘・用比較） | 200字詰原稿用紙 | ペラ便箋横綴じ・鉛筆書き | 1958年 |
| | 印刷台本・1958年10月 | Ｂ５ | 横綴じ・ガリ版印刷 | 1958年 |
| | 脚本草稿（持永只仁署名入） | 200字詰原稿用紙 | ペラ便箋横綴じ・鉛筆書き | 1984年 |
| | 絵コンテ初稿（鉛筆・色鉛筆描き） | Ｂ４・６枚 | 横綴じ・肉筆・枠印刷 | 1984年 |
| | 絵コンテ一稿（上記のコピー） | Ｂ４・10枚 | 横綴じ・白黒コピー用紙 | 1984年 |
| | 絵コンテ四稿（鉛筆・色鉛筆描き） | Ａ４・９枚 | 人形映画絵コンテ専用用紙 | 1991年 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 少年と子だぬき | 絵コンテ手描き・スタッフ用原稿 | Ｂ４・９枚 | 横綴じ・肉筆・枠印刷 | 1991年 |
| | 絵コンテ彩色手描き・持永只仁用 | 255㎜×275㎜・56頁 | 横綴じ・肉筆・枠印刷 | 1991年 |
| | タイムシート | Ｂ４・15枚 | 横綴じ・専用用紙 | 1991年 |
| | カット説明表 | Ａ４・16枚 | ワープロ原稿のコピー | 1991年 |
| | 撮影記録・持永只仁記 | Ｂ５ノート | 縦ノート横書き | 1991年 |
| | トップタイトル原稿・スーパー用セル画 | 原稿多数・セル画２枚 | Ｂ５半紙・スタンダード用セル画小 | 1991年 |

表10の「少年と子だぬき」のうち、絵コンテ彩色手描き・持永只仁用の一部を図12に示した。

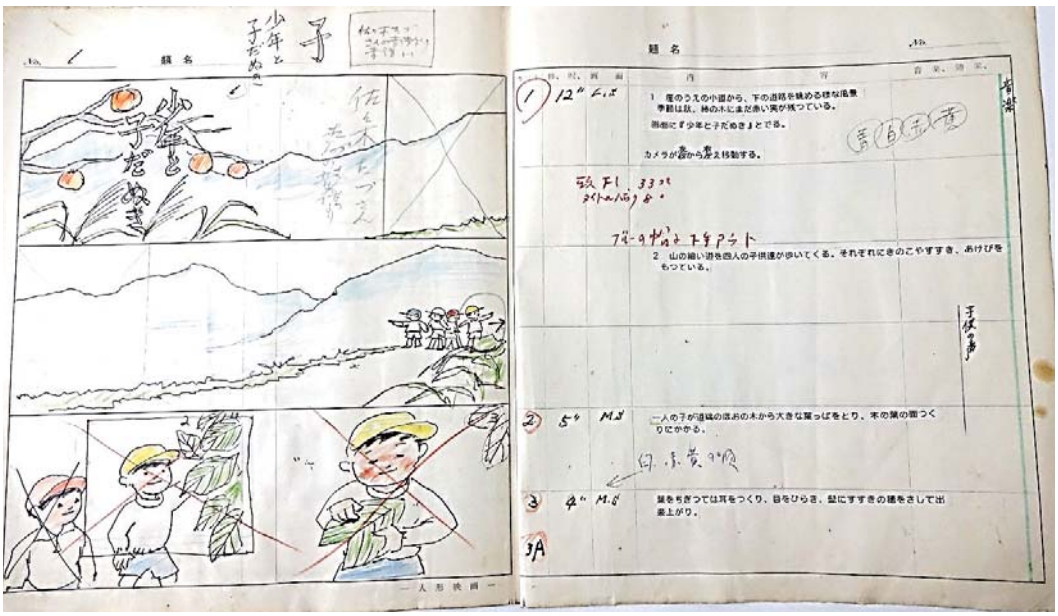



**図12　「少年と子だぬき」の絵コンテ彩色手描き**

### ３．２　人形映画製作所のテレビ CM 作品

1950年代初頭に日本で本格的な商業テレビ放映が始まるとともに、民間放送局でコマーシャル放映も行われるようになった。当時は電子記録媒体による収録技術が希少かつ高額で、CM の大半は生放送中の商品紹介や生コマーシャルなど独立したコンテンツとして作られていなかったが、次第にフィルム収録の CF（コマーシャル・フィルム）も用いられるようになり、アニメーションを用いた CM もその数を増やしていった。

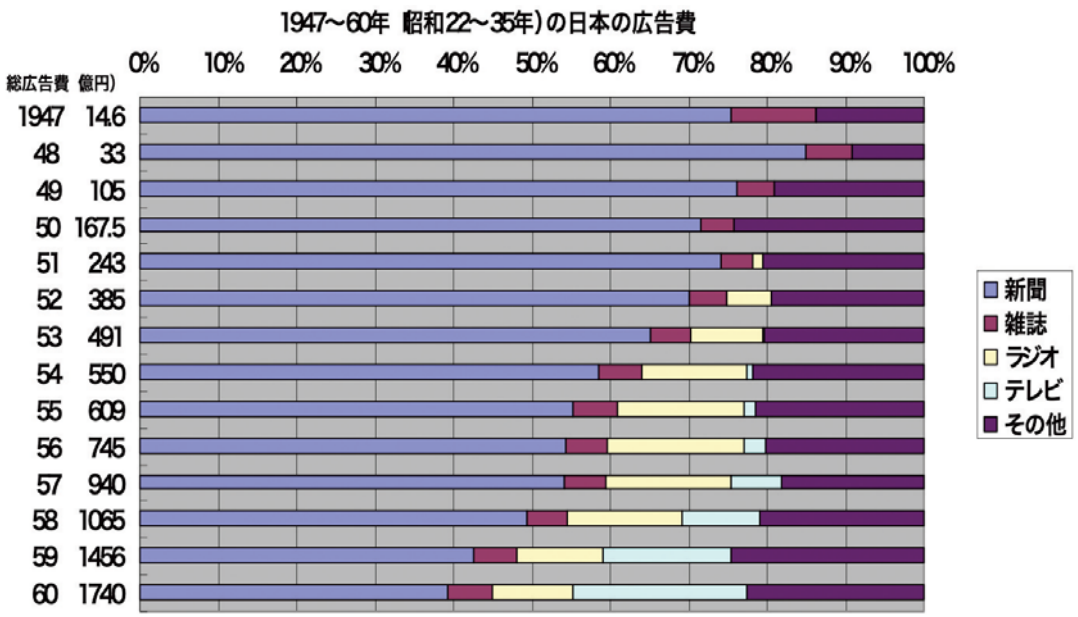



**図13　戦後の各メディアの普及割合**[4)]

図13から1954年からテレビによる広告が見られ、テレビの普及に伴い、その数が増えていき、新聞広告などが減少していくことが分かる。

**表11　人形映画製作所で製作されたテレビ CM のリスト**

| CM 制作年代 | 製品・会社名 |
|---|---|
| 1957（昭和32）年～1958（昭和33）年 | エビオス・朝日麦酒（後のアサヒビール、法人としては現在のアサヒグループホールディングス）（ヘルスケア事業）<br>1958年３月以降（「エビオス2000錠」発売） |
| 1957（昭和32）年～1958（昭和33）年 | チョコラ劇場・日本衛材株式会社（現エーザイ株式会社）（医療品）（1952年初代チョコラ BB 発売） |
| 1957（昭和32）年～1958（昭和33）年 | デイリィメンアイスクリーム・Meadow Gold Dairies（乳製品） |
| ? | ☆ニッカウヰスキー・ニッカウヰスキー株式会社（食料品） |
| 1959（昭和34）年頃 | パイロット万年筆・パイロット萬年筆株式会社（現株式会社パイロットコーポレーション）（文房具・玩具・貴金属） |
| 1957（昭和32）～1958（昭和33）年 | 大洋漁業・大洋漁業株式会社（現マルハニチロ株式会社）（食料品） |
| 1958（昭和33）年頃 | 中外製薬・中外製薬株式会社（医療品） |
| 1956（昭和31）年頃 | 富士フィルム・富士写真フイルム株式会社（現富士フイルム株式会社）（化学） |
| 1956（昭和31）年～ | 服部時計店・株式会社服部時計店（現セイコーホールディングス株式会社）（精密機器） |
| 1957（昭和32）年～ | ナショナル坊や・松下電器産業株式会社（現パナソニックホールディングス株式会社）（電気機器） |

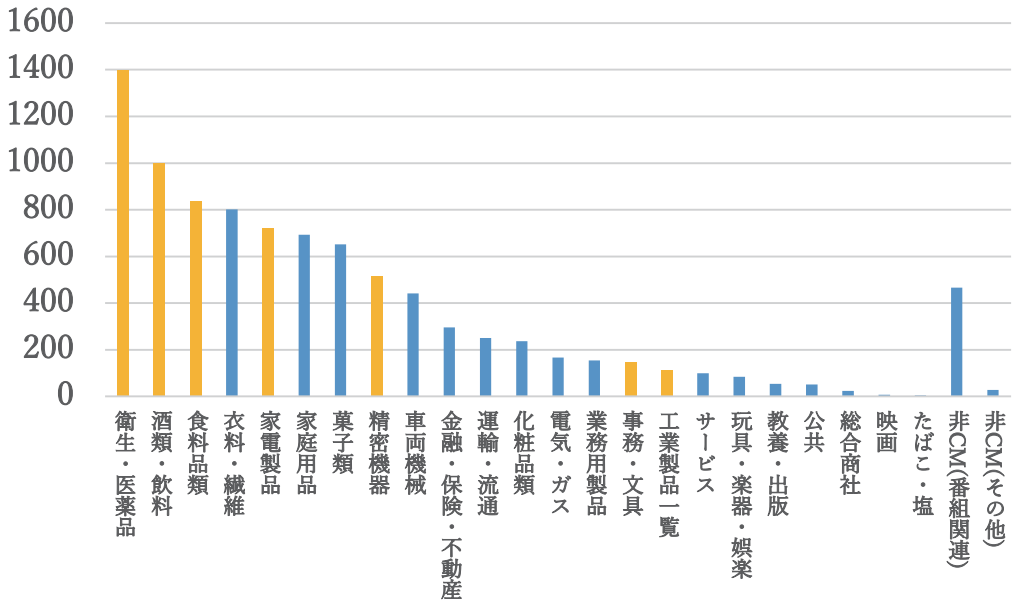



**図14　1950代から1960年代までに製作されたテレビ CM 業種別収録数**[5)]

図14は、1954（昭和29）年から1968（昭和43）年までに製作されたテレビ CM 業種別収録数である。表11で取り上げられている業種とよく一致している。

### 3．2．1　エビオス　1957（昭和32）年～1958（昭和33）年

1928（昭和３）年に大日本麦酒株式会社目黒工場内に『エビオス』製造工場を設置する。1949　（昭和24）年に大日本麦酒株式会社の分割により、大日本ビタミン製薬株式会社が朝日麦酒株式会社の直系会社となる。1958年３月に「エビオス錠2000」発売する。1964（昭和39）年に大日本ビタミン製薬株式会社から、エビオス薬品工業株式会社に改称する[6)]。図15に「エビオス」のテレビ CM のスチル写真(1)，(2)を示した。男の子と女の子の人形がエビオスの製品を抱えて自動車に乗せようとしている。

**図15　「エビオス」のテレビ CM のスチル写真左(1)，右(2)**

### 3．2．2　チョコラ劇場　1957（昭和32）年～1958（昭和33）年

前身の合資会社桜ヶ岡研究所の創業は1936（昭和10）年で内藤豊次が創業者である。創業当初は、ビタミンＥから始まり、ネオサンプーン（避妊薬）、チョコラシリーズ等を手がけていった。この“チョコラ”とは、チョコレートとコーラをもじって考えたネーミングである。1941（昭和16）年に日本衛材株式会社

を設立し、両社は1944（昭和19）年に統合して日本衛材株式会社となる。高単位Ｂ２Ｂ１剤『チョコラ BB 錠』を日本で発売する。1955（昭和30）年にエーザイ株式会社に社名変更した[7]。図16に「チョコラ劇場」のテレビ CM のスチル写真(1)，(2)を示した。ピエロ姿の人形が何かの紹介をしている。

**図16　「チョコラ劇場」のテレビ CM のスチル写真左(1)，右(2)**

### ３．２．３　デイリィメンアイスクリーム　1957（昭和32）年～1958（昭和33）年

1897（明治30）年に７つの乳業を組み合わせて設立された Meadow Gold Dairies は、当初「乳製品協会」

**図17　「デイリィメンアイスクリーム」のテレビ CM のスチル写真上左(1)，上右(2)，左(3)**

で、ハワイで事業を行っている乳製品会社であった。カンザス州トピカでコンチネンタルクリームリーカンパニーとして創業したMeadow Gold® Dairyは、1901（明治34）年以来、新鮮な乳製品を生産している。当時、「メドウゴールド」という名前は、当社の新鮮なクリーマリーバターの黄金色の品質を表現するために、従業員によって選ばれた。ビアトリスフーズが1953（昭和28）年に会社を買収し、1959（昭和34）年に会社名は「メドウゴールドデイリーズ」に変更された[8]。図17に「デイリィメンアイスクリーム」のテレビCMのスチル写真(1)，(2)，(3)を示した。人形たちがアイスクリームを紹介したり運んだりしている。

### 3．2．4　パイロット万年筆　1959（昭和34）年頃

1918（大正７）年１月27日、日本初の純国産の金ペンの製造に成功した並木良輔は、東京商船学校（現東京海洋大学）同窓の和田正雄とともに株式会社並木製作所を設立した。1938（昭和13）年にパイロット萬年筆株式会社に、1989（平成元）年に株式会社パイロットに商号を変更した[9]。図18に「パイロット万年筆」のテレビCMのスチル写真(1)，(2)を示した。ぬいぐるみの犬たちがリボンのついた箱を口にくわえて運んでいる。

**図18　「パイロット万年筆」のテレビCMのスチル写真左(1)，右(2)**

### 3．2．5　大洋漁業　1957（昭和32）年～1958（昭和33）年

1936（昭和11）年に大洋捕鯨株式会社を設立し南氷洋捕鯨を開始、戦時下の水産統制令により1943（昭和18）年には内地水産部門と大洋捕鯨株式会社等を合併し西太平洋漁業統制株式会社に改称した。戦局悪化と共に漁業用船舶を徴用され大打撃を受けた。戦後は大洋漁業株式会社と改称し、1946年（昭和21年）

図19　「大洋漁業」のテレビ CM のスチル写真上左(1)，上右(2)，左(3)

には捕鯨を再開した。法人格としては持株会社化やニチロとの経営統合、グループ企業との吸収合併を経て現在の「マルハニチロ」として継続している[10]。図19に「大洋漁業」のテレビ CM のスチル写真(1)，(2)，(3)を示した。大人が打ち合わせをしている様子を人形、作業場やその付近の家屋のミニチュアで精巧に表現されている。

### 3．2．6　中外製薬　1958（昭和33）年頃

1924（大正13）年に東京市京橋区にて Roche 日本法人「NSY 合名会社」が創立された。日本国内で製造承認を取得した最初の外資系医薬品企業であった。1925（大正14）年 3 月に上野十藏によって中外新薬商会として創立された。1932（昭和 7 ）年には NSY 合名会社が株式会社に組織変更し、日本ロシュ株式会社に商号を変更した。解熱鎮痛剤「フジサワサリドン」を製造・発売した。1943（昭和18）年 3 月に中外新薬商会が株式会社に組織変更し、中外製薬株式会社に商号を変更した。当初はブドウ糖などを生産した。1944（昭和19）年 9 月に中外製薬は株式会社松永

図20　「中外製薬」のテレビ CM のスチル写真左(1)，右(2)

図21　「中外製薬」の雑誌広告

図22　テレビ CM の人形

製薬所を吸収合併し、広島県に松永工場を開設し、1946（昭和21）年９月には中外製薬鏡石工場を建設した[11]。図20に「中外製薬」のテレビ CM のスチル写真(1)，(2)を示した。ヴィーナスという商品名からボッティチェッリの絵画「ヴィーナスの誕生」のシーンを彷彿させる人形が中外製薬の製品「ヴィーナス錠」を片手に持って紹介している。図21は雑誌の広告、図22はテレビ CM の人形の実物である。

### ３．２．７　富士フイルム　1956（昭和31）年頃

1934（昭和９）年に写真フィルムの国産化を目指すため、大日本セルロイド（現：ダイセル本社　大阪市）の写真事業を分社して富士写真フイルム株式会社として設立された[12]。

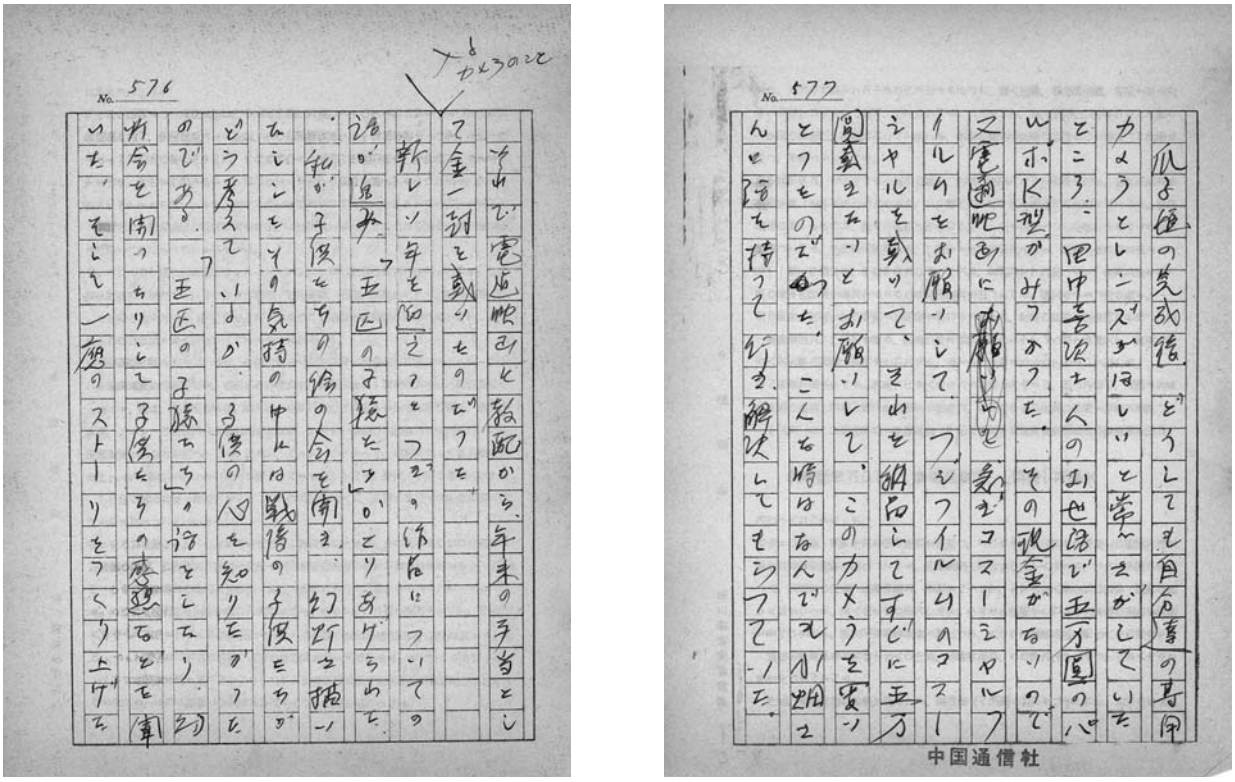



**図23　持永只仁の回顧録の「富士フイルム」についての記述**

図23に持永只仁の回顧録の「富士フイルム」についての記述の実物を示した。持永は、回顧録の中でつぎのように記述している。「瓜子姫の完成後、どうしても自分達の専用のカメラとレンズがほしいと常々さがしていたところ、田中喜次さんのお世話で五万圓のパルボＫ型がみつかった。その現金がないので又電通映画に急ぎコマーシャルフィルムをお願いして、富士フイルムのコマーシャルを戴いて、それを納品してすぐに五万圓を戴きたいとお願いして、買うとつもりだった。こんな時はなんでも小畑さんに話を持っていき、解決してもらっていた。それで電通映画と教配から、年末の手当として金一封を戴いたのだった。新しい年を迎えてと次の作品についての話が進み「５匹の子猿たち」が取り上げられて、私が子供たちの絵の会を開き、幻灯に描いたりしたその気持の中には戦後の子供たちがどう考えているか、子供の心を知りたかったのである。「５匹の子猿たち」の話をしたり、幻灯会を開いたりして子供達の感想などを聞いた。そして一応のストーリーを作り上げた。それで電通映画と教配から、年末の手当として金一封を戴いたのだった。」[13]

図24に「富士フイルム」のテレビ CM のスチル写真(1)，(2)，(3)を示した。原始人とマンモスの戦いが表現されている。

**図24　「富士フイルム」のテレビ CM のスチル写真上左(1)，上右(2)，左(3)**

### ３．２．８　服部時計店　1956（昭和31）年～

服部時計店は、1881（明治14）年12月に服部金太郎が創業した輸入時計・宝飾品の販売店で、その後時計の製造卸売会社、精密機器・電子部品・電子機器メーカーとして発展する。株式会社服部時計店は1917（大正６）年に会社化された。1892（明治25）年に創業の時計製造部門の精工舎は1949（昭和24）年に東京証券取引所に上場する[14]。図25に「服部時計店」のテレビ CM のスチル写真(1)，(2)を示した。いくつかの鳥の形をしたアーマチュアを撮影している。

**図25　「服部時計店」のテレビ CM のスチル写真左(1)，右(2)**

人形映画製作所の日誌には、下記のように服部時計店関係の記述がある。図26に人形映画製作所の日誌の実物を示した。

1956（昭和31）年

４月28日　服部のメンドリ　４月28日完成

５月２日　めんどりの頭刺し

５月３日　服部のセット完成

５月４日　にわとり（めんどり）

５月10日　服部のメンドリのスカート作り

５月11日　メンドリの上衣作り

５月12日　服部のセット組立・かざりつけ等、メンドリ上衣・袖作り

５月12日　天然色テスト、あひる親子の羽作り

５月15日　精工舎の撮影

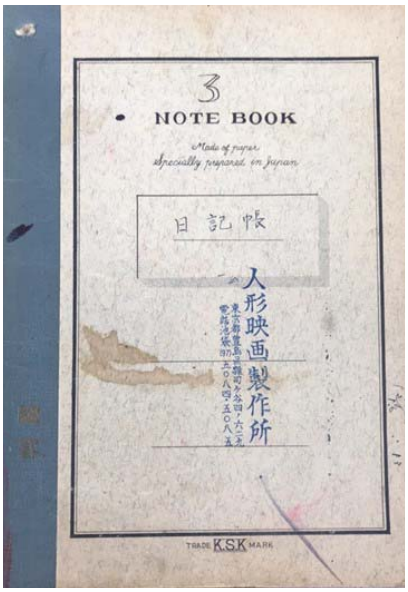



図26　人形映画製作所の日誌

### ３．２．９　ナショナル坊や　1957（昭和32）年～

「ナショナル坊や」は、1957（昭和32）年にミキサーの広告に起用した「トマト坊や」をもとに誕生したキャラクターで当時のナショナルの広告やナショナルのお店の店頭で用いられた。また「明るいナショナル」というCMソングは、「ナショナル坊や」が世界を回りながら、テレビ、ラジオ、掃除機など、当時の最新家電たちを運ぶという内容である。作詞：三木鶏郎、作曲：三木鶏郎で、歌詞は「明るいナショナル明るいナショナルみんな　家中電気で　動く明るいナショナル明るいナショナルラジオ　テレビなんでもナショナル」である。「電化製品で動く明るい我が家」というテーマで作られたこの曲は、テレビ番組『ナショナル劇場』（1956年～）やラジオ番組『歌のない歌謡曲』（1951年～）の冒頭で流れ、当時のナショナルのイメージソングとし長年愛された[15]。

ユマソンの家元

質量とも圧倒的な三木鶏郎

"NHK追放"でこの道に精出す

三木鶏郎

図27　「ナショナル坊や」の新聞記事

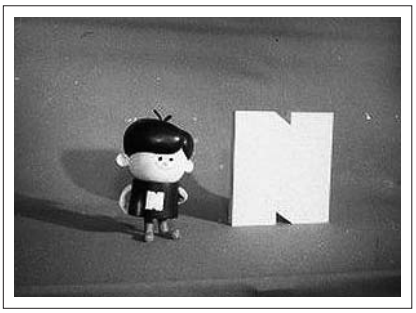


図28　「ナショナル坊や」のテレビCMのスチル写真

図27に「ナショナル坊や」の新聞記事と図28に「ナショナル坊や」のテレビCMのスチル写真を示した。図27の記事はCMソングについてであり、図28は「ナショナル坊や」のキャラクターとロゴが撮影されている。

### ３．２．10　ビールむかしむかし1956（昭和31）年

アサヒビールのCMのマスコットである「ほろにが君」が、ビール博物館を案内しながら人類とビールの歴史を紹介する。バビロニアやエジプトから始まり、ヨーロッパ中世では僧侶がビールを製造する。

チェコやドイツでのビール製造からペリーの来航で日本に渡来した。その後北海道で国産ビールが生産されるまでが紹介されている。

ビールむかしむかし

（スタッフ）製作：小畑敏一・稲村喜一、演出・脚本：飯沢匡、撮影：岸次郎、音楽：服部正、美術：江口準次、録音：加藤一郎、照明：鈴賀隆夫、人形製作：川本喜八郎、人形操作：持永只仁、セロファン影絵：大藤信郎

（特記事項）第２回全日本 PR 映画コンクール通産大臣賞（1956年）最優秀作品・色彩部門第１位受賞、キネマ旬報ベスト・テン文化映画（1956年）第９位、教育短編映画ベストテン（1956年）第４位

図29に「ビールむかしむかし」の撮影風景と図30に「ビールむかしむかし」のスチル写真(1), (2)を示した。ともにヨーロッパ中世のビールにまつわる日々の様子が人形たちで表現されている。

**図29 「ビールむかしむかし」の撮影風景（手前　持永只仁）**

**図30 「ビールむかしむかし」のスチル写真左(1)，右(2)**

人形映画製作所の製作日誌には、下記のようにビールむかしむかしの記述がある。

1956（昭和31）年

５月11日　アサヒビール打ち合わせ　田中・吉田両先生

５月21日　アサヒビールの撮影開始　午前中、博物館と庭のセットを仕上げて午前より撮影。飯沢、土方、川本、各氏沢山の方々が見えられた

５月22日　あさひビール撮影継続　ほろにが君の場面、持永、川本さん人形操作
移動、佐藤さん、記録、持永さん

５月23日　撮影継続、あさひビールシーン四十、最後　持永さん、川本さん人形操作

５月24日　タイトルバック撮影、川本さんも持永さんと操作。ビールの小道具手伝い

５月25日　ビールの小道具手伝い、色塗り
５月26日　ビールのセット手伝い、樽ぬり、どう画切り抜き色ぬり、持永（女）さん他の人形の人が手伝い。撮影夜間開始　セットはそのまま
５月28日　お祭りのセット準備、キャメラの位置定まり　撮影は出来ず　みんなあさひビールに集中。
５月29日　Ｓ30､チェッコの地図の下にほろにが君　額の中の地図レンズ前に飛び散り､その向こうで踊っている人々　踊りの四小節まで撮影終り。
５月30日　今日は暑い　チェッコの踊ロング、朝キャメラ位置、定舞台たりないところをついで、午後から撮影に入る。岩波の竹本さん方来られる、ケーキの救援物資あり。
６月１日　　昨日つづき、夕方早く上る。
６月２日　チェッコの踊近景終る。踊の部分全部終り、チェッコセット片付け。日動の山本さん、青年グループの小森さん方見える。古代ゲルマニアセット組立。中世ドイツ地下室のビール工場セット組立。

## ４．考察

本研究において、持永只仁の人形映画製作所時代の一次資料を整理、分類した。従来は、映画作品そのもの評価によることが多かったが、これらの資料と映像を対比して調査することで、制作過程の細かな工夫や苦労している部分などが分かる。例えば、持永只仁の直筆の絵コンテを観ることで、書き込まれた加筆、修正点から製作過程での制作者の意図がどのようにアニメーションで表現されているかを知ることができる。

このことは作品研究として一次資料が手元にあることが大きい。作品毎の傾向や類似点を示していくことで持永の制作スタイルを明らかにしていくことができる。また、人形映画作品の一次資料として、道具、治具、関節制御方法、コマ撮りのタイムスケールやリップシンクの方法等、膨大な技術的知見やそれによる表現の意思や決定プロセスが残っていることが、研究を進める上で貴重な情報となり得る。以下、本研究におけるにおける知見を述べる。

### ４．１　教育映画作品スタッフ相関

本研究において、人形映画製作所におけるスタッフが記載された資料が発見されたことで、これまで不明確な情報を補うことができ、持永作品の主要なスタッフの関わりを明らかにすることができた。そのほとんどが、当時の実写映画監督や脚本、映画美術、特殊撮影技術にも関わっていることも分かってきた。

各人形アニメーション映画の制作スタッフの変遷を表12にまとめた。各作品を番号で示した。製作は、人形映画製作所時代を通して製作は電通映画社、人形映画製作所、稲村喜一であり、演出は持永只仁、撮影は岸次郎が一貫して行っていることがわかる。脚本では田中喜次が３作品、村治夫が４作品、中江隆介が２作品を担当している。人形制作では、川本喜八郎が５作品を担当している。音楽では、加藤三雄が４作品、林光が２作品を担当している。

**表12　人形アニメーション映画の制作スタッフの変遷**

<table>
<tr><th></th><th>1</th><th>2</th><th>3</th><th>4</th><th>5</th><th>6</th><th>7</th><th>8</th><th>9</th><th>10</th></tr>
<tr><td>製作</td><td colspan="9">電通映画社　人形映画製作所　稲村喜一</td><td>童映社</td></tr>
<tr><td>原作</td><td colspan="2"></td><td colspan="2">ヘレン・バーマン</td><td>石井桃子</td><td colspan="5"></td><td>佐々木たづ</td></tr>
<tr><td>脚本</td><td colspan="2">田中喜次</td><td colspan="3">村治夫</td><td>田中喜次</td><td></td><td>村治夫<br>中江隆介</td><td>中江隆介</td><td></td></tr>
<tr><td rowspan="2">演出</td><td colspan="10">持永只仁</td></tr>
<tr><td colspan="2">田中喜次</td><td colspan="2"></td><td colspan="2">田中喜次</td><td colspan="3"></td><td></td></tr>
<tr><td>撮影</td><td colspan="9">岸次郎</td><td>持永只仁</td></tr>
<tr><td>美術</td><td>吉田謙吉</td><td colspan="3">江口準次</td><td colspan="2"></td><td>久保一夫</td><td colspan="2"></td><td>岸田香代子・鳴脇みえ子</td></tr>
<tr><td>人形制作</td><td colspan="2"></td><td colspan="5">川本喜八郎</td><td>熊谷達子</td><td>田畑精一</td><td>田畑純子</td></tr>
<tr><td>音楽</td><td></td><td colspan="3">加藤三雄</td><td></td><td>加藤三雄</td><td></td><td colspan="2">林光</td><td>小森昭宏</td></tr>
<tr><td>美術監督</td><td colspan="5"></td><td>水谷浩</td><td colspan="4"></td></tr>
<tr><td>録音</td><td colspan="5"></td><td>田中啓次</td><td colspan="4"></td></tr>
<tr><td>照明</td><td colspan="5"></td><td>鈴賀隆夫</td><td colspan="2"></td><td>アバコスタジオ・小島章</td></tr>
</table>

1瓜子姫とあまのじゃく　2五匹の子猿たち　3ちびくろさんぼのとらたいじ　4ちびくろさんぼとふたごのおとうと　5ふしぎな太鼓　6こぶとり　7ぶんぶくちやがま　8ペンギンぼうやルルとキキ　9王さまになったきつね　10少年と子だぬき

### 4．2　テレビ CM 作品における意義

持永の原資料から発見されたテレビ CM のスチル写真の調査を行った。持永は当初、自身の人形アニメーションの制作のために必要な機材を買うためにテレビ CM の制作を行っていた。当時は商品名とパッケージを提示する商品実写型が多かった中で、ストーリーをイメージ映像で展開し、視聴者を商品の紹介に誘導するイメージ誘導型を用いた。

当時のテレビ CM はキャッチコピーや歌、言葉の反復等を用いて会社や商品の広告を行っていたが、持永がイメージの要素が強い人形アニメーションを用いてテレビ CM を制作したことはアニメーション CM の表現を広げたのではないだろうか。

新聞や印刷メディアの広告は、図案や書体によるイメージの演出で購買者の意欲を高めていたが、テレビ CM において人物や音声言語よりも、個性的なキャラクター造形や人形映画独特の動きが視聴者の目を引くことになった。さらに、商品名とパッケージを提示する商品実写型が多かった中で、ストーリーをイメージ映像で展開し、視聴者を商品の紹介に誘導するイメージ誘導型を用いた。それにより、スポンサーからの依頼が増加し、人形映画製作所において教育映画制作の必要機材購入資金になっていたことが資料により伺える。

つまり、人形映画製作所における人形アニメーション作品は、極めて芸術性と創造性が高い教育映画作品とテレビ CM 作品によって、当時の視聴覚教育と広告メディアへの強い影響力を持っていたことが伺える。

## 6．まとめ

持永が大切にしている動きの要素としては、子供向けの作品を大切にするからこそリアリティを目指し

ていることが資料より読み取れる。今後の展開としては、絵コンテ、制作ノート、作品フイルム等の定性的、定量的分析から動画の動き要素の解析、人形動作の「溜め」「抜き」による緩急、動作の誇張表現における撮影コマ数の撮影増減等の研究を進めていく。

さらに、現存人形の３Ｄスキャンニングしたデータを基に３Ｄプリンターにより人形を再現し、人形映画作品をフレーム解析したデータを用いて、持永アニメーションの動き制御を追体験する。CG 全盛である現在のアニメーション制作体制において、人が自分の手で動かしていくアナログな人形映画独自の動き制御方法を再現することで、持永が目指した動きのリアリティを解析し知見を高めていく。

## 文献


1．持永只仁『アニメーション日中交流記持永只仁自伝』東方書店、2006年、p. 171
2．日本アニメーション映画史　山口且訓・渡辺泰共著　プラネット編　有文社　1977年　pp. 248-257
3．田中純一郎　日本教育映画発達史　蝸牛社　1979年　pp. 242－244
4．磯部祥文　戦後日本の広告産業―インターネット広告の意義と今後の展望―　2005. 1 . 17、p. 2
http://www.ritsumei.ac.jp/~yamai/9 kisei/isobe.pdf
5．高野光平・難波功士：テレビ・コマーシャルの考古学―昭和30年代のメディアと文化―世界思想社、2010、p. 4
6．エビオス：アサヒグループ食品の歴史・沿革　https://www.asahi-gf.co.jp/company/history/
7．エーザイ　https://ja.wikipedia.org/wiki/エーザイ
8．Meadow Gold® Dairies　https://meadowgolddairy.com/our-history/
9．パイロットコーポレーション　https://ja.wikipedia.org/wiki/パイロットコーポレーション
10. マルハ　https://ja.wikipedia.org/wiki/マルハ
11. 中外製薬　https://ja.wikipedia.org/wiki/中外製薬
12. 富士フイルム　https://ja.wikipedia.org/wiki/富士フイルム
13. 持永只仁：未発表の手書きの回顧録　pp. 576-577
14. 服部時計店　https://ja.wikipedia.org/wiki/服部時計店
15. パナソニック株式会社のプレスリリース　2018年３月２日09時43分
https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000104.000024101.html


## Abstract


Animation productions of Mochinaga Tadahito can be divided into the following categories: celluloid animation before and during World War II, puppet animation film production in China after World War II, educational films and commercials using puppet animation at the Puppet Film Factory after returning to Japan, and puppet animation film production at MOM Productions which was commissioned by Rankin−Bass Production. This paper investigates the puppet animation films produced during the puppet film production period and the TV commercial productions that financed the production of these films.

Keywords: Mochinaga Tadahito, Puppet film production, Puppet animation film, TV commercial, Storyboard